

# 教育研究所は先生方を支援することができるか

## － 学ぶことと発すること－

副所長 水野 幸郎

### I 福井県の学校力と教師力の向上を支援する

#### 1 平成 24 年度福井県教育研究所のマネジメントプランを作成する

本所のミッションは「支援」、県内の先生方が学びたいことを研究し、情報や成果を伝達することである。新学習指導要領が走り出した。知識技能の習得だけでなく、思考力・判断力・表現力の育成、学習意欲の向上等、社会を生き抜く力を育むことが目指されている。この新たな学びを支えるための資質能力を向上させたい。

いじめ・不登校などへの対応、ICT の活用といった最先端教育等の新しい課題への対応について学びたい。大量退職、多忙化等による教員社会の変化に対応する学校づくりを進めたい。

このような多様な学びを先生方は求めている。それらの要望に応えるために教育研究所は、資質能力を高めようとする一人ひとりの教職員を支援すること、そうした教職員同士が支え合いチームとして取り組もうとしている学校を支援することを目指している。

教育研究所が組織として取り組むためにマネジメントプランを明確化した。

#### 2 「支援」をフィルターとして目標を設定し、業務を遂行する

教育研究所における業務は、研修講座の運営をはじめすべてが学ぶことから始まる。

スタッフ 49 名の中に 19 名の研究員が含まれ、研究テーマは各課で決めた重点目標を基に各自で設定する。他のスタッフも含め、目標を設定したり業務を遂行したりするとき、妥当かどうかの判断基準は先生方を支援するのに役立つかどうかと考えることをフィルターにする。これにより方向性を一本化することができる。

業務を遂行するためには、スタッフとしての力量向上が必須であり、研究の深化には所内の協働研究が必要である。日々実践と振り返りを行い、協働研究会で共有することで所の力量の向上を目指している。

### II 「受講者が主役の研修講座」と「分かる授業づくりに役立つ S A S A」が支援する

#### 1 働き盛りの先生に、ミドルステップアップ研修が「新たな学び」を支援する

忙しい人のところに仕事が集まるとはよく言われる。学校を動かす中心となる先生方には、1 日たりとも学校を離れて欲しくない。しかし、次々に迫り来る課題に学校がチームとして対応していくために、ミドルアップ・ダウンシステムの要としてのミドルリーダーに成長することも期待したい。

ミドルステップアップ研修は、年間をとおして 5 日間だけ研究所まで来ていただいている。理論を学ぶとともに、校種、世代を越えた先生方と出会い、共に語り合い、考えあうことで主体的な実践者になることを目指している。

その上で、所員が各々の学校を訪問することにより、課題解決に向けた取組みについて支援を行っている。

新しい出会いにより連携・接続の視点を獲得することで見識が深まり、実践そのものを研修とする新たな学びによりミドルリーダーとしての力量向上が図られる。

2 活用力をつける授業をめざす先生に、「SASA 指導例」で授業改善を支援する

毎日、新教育課程に沿った授業で「活用する力」を育むために授業を工夫されている。小学校5年間、中学校2年間でどれくらい定着したかSASAが調査する。結果を分析し、課題を洗い出し、克服するための方法を提案する。また、日々の授業の中で、どのような発問をするのか、どのような学習活動を取り入れるのか。報告書の具体的な教材や指導例を活用していただくことで授業改善に役立てていただきたい。

3 意欲を引き出す授業をめざす先生に、「興味・関心」を喚起する ICT 活用を支援する

関心・意欲を豊かにし、集中力を高める方法に ICT の活用がある。授業時間すべてを ICT にたよるのではなく、ここぞというときに視覚や聴覚に訴えることは効果的である。教科書や資料を大きく映すことで全員が共有することが可能となり、「分かりやすい」「楽しい」授業となることで関心・意欲が高まる。

意欲を引き出す授業を ICT 活用の研修が支援する。

4 コミュニケーション力の育成をめざす先生に、「学級経営」の深化を支援する

考える力をつけるためには、他人とのコミュニケーション力をつけることが必要かつ重要である。小中学校では、コミュニケーション力は学級経営の深化と同時進行で伸びていくと考えられる。

教室を落ち着いた学びの空間にするための学級づくりを教育相談課の研修や要請訪問研修が支援する。

### Ⅲ 研究発表会を学びの空間にする

1 テーマは「学び合い 語り合い 伸ばそう教師力」

所員の研究成果を直接伝える最大の場が「第29回福井県教育研究所研究発表会」である。

参加者の学びたい気持ちに応えたい。前回は、20分間の発表後10分間協議をしていた。今回、発表時間を50分に拡大し、学びを深め、参加者同士や発表者とも意見を交換し合うことで成長し、「参加して、発表して、本当によかった」と思える研究発表に改めた。

2 一人ひとりの心にとどく「発信」を目指して

研究所の取組み・研究内容を県内の先生方にもっと知っていただき、その成果を活用していただきたい。そのために、今回の研究発表会は、2年間の研究をまとめることはもちろん、いかにして学びの空間を創造するか、プレゼンの仕方を工夫することに力を注いだ。研究発表会・研修講座やその他刊行物など一人でも多くの先生方の心にとどくような発信の工夫が必要である。今年度、研究発表会と紀要の改善から始めた。

来年度、研修講座をはじめすべての取組みで、発信の工夫・改善を目指す。

### Ⅳ 心を動かす研修講座や報告を目指して

研究所の取組みが先生方の支援になっているかどうかは、一人ひとりの心を動かすことができるかに係る。研究所で見たり聞いたり、研究所から発信されたものを読んだり理解したりして、「これはおもしろい。是非試してみよう」と思われ、授業改善や学校・学級経営に活かされるかどうかは鍵である。

今年度、研修が終わったずっと後に、アンケートで研修評価をお願いした方があった。実際に活かされることで所の取組みが先生方を支援したことになると考えられる。来年度も、研修講座などの何か月か後のアンケートに協力していただく中で、評価をし、更なる改善へのご意見をいただくことで所も学んでいきたい。